

## 「社会のため」に生きる僧侶たち

—北タイ・チェンマイ県 D 寺のある僧侶を事例として—

## Buddhist Monks Living for Society

—A Case Study of a Buddhist Monk at Wat D, Chiang Mai in Northern Thailand—

岡部 真由美

OKABE Mayumi

As national development has progressed since the 1960s in Thailand, some Buddhist monks started to be called “development monks”. “Development monk”, however, has been an elusive concept because its meaning varies depending on how, when, and by whom it is used. In spite of all this, it is still found that there are some young monks who admire the senior monks as “development monks” and try to become a “development monk” in today’s Thailand. This current situation, therefore, allows a reconsideration of the approach to “development monks” among the former studies. Instead, this paper approaches “development monks” from the viewpoint of one young Buddhist monk. It aims to examine the meaning of “development monks” both at an individual level and at a social level in present day Thailand.

Considering this case study, it is pointed out that some young monks, for example monk “T” at Wat D, Chiang Mai, try to work “for society” and identify themselves as “development monks”. Unlike the former senior generation, the young monks work “for society” going beyond the relationships among the monks within Sangha community, as well as the relationships between the monks and the local community. Their attempts, therefore, could be understood as a process of looking for self-identities under modernity in contemporary Thai society.

## 1. はじめに：研究の背景と目的

本稿の目的は、北タイの中心都市チェンマイ近郊の D 寺を舞台に、ある一人の僧侶の活動を事例とし、僧侶自身にとって「開発僧」とは何を意味するのかを明らかにし、またそのことが社会的にどのような意味をもつかを考察することである。

1960年代以降、タイでは急速に国家レベルで地域開発が進められる中、村落部においては僧侶による独自の開発活動が行われるようになった。正確に年代を特定することはできないが、おそらく1970年代末頃から、彼ら僧侶たちは開発僧 (*phra*

*nak phatthana*) <sup>1)</sup> と呼ばれるようになった。その一方で、今なお「開発僧」とは誰か、あるいは「開発僧」とは何かという問いがなされるように、「開発僧」は依然としてとらえどころのないものであり続けている。このとらえどころのなさは、「開発僧」という用語の発生の経緯と、この言葉を用いる主体の複数性や用いられ方の多様性に起因している。櫻井も指摘するように、「開発僧」をめぐるのは、自称に過ぎない場合、他称に過ぎない場合、自他ともに認めている場合など、さまざまなケースがある [櫻井 2008 : 173-176]。

開発の時代から 40 年余りが経過した今日、地域

開発を行う僧侶を、好んで「開発僧」と名付けるのは、NGOなどの開発実践者のみならず、僧侶たち自身でもある。彼らの中には、自らの師を「開発僧」として仰いだり、自らを「開発僧」と名乗ったりするものが存在しているのである。このことは、僧侶たちが単に名づけの対象であるのみならず、場合によっては名づける主体、また、名乗る主体にもなりうることを意味している。だとすれば、今日のタイ社会における「開発僧」をめぐるのは、著名な「開発僧」の紹介や、「開発僧」という名づけの政治性を指摘するだけでなく、僧侶自身にとって「開発僧」とは何かを考察する必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、ある若手僧侶のライフヒストリーを取り上げて、僧侶個人の経験をもとに「開発僧」とは何を意味するかを探ることとする。この事例は、決して自他ともに認める「開発僧」ではないし、また本人が「開発僧」という強い自己意識をもつわけでもない。しかし、彼は、自らの師を「開発僧」と仰ぎ、その師から地域開発の活動を継承し、また北タイにおける「開発僧」ネットワークの立ち上げに尽力した人物である。このような事例を取り上げるのは、僧侶個人が今まさに「開発僧」という言説とどのように向かい合いながら生きているか、その実践に接近するためである。

## 2. 先行研究の検討と本稿の視座

### (1) 「開発僧」に関する研究

研究者の間で、開発僧という語が初めて使われたのは、社会学者ピニットによる著作『地域開発における僧侶の役割 (*botbat phrasong nai kan phatthana chonnabot*)』においてであると言われ

ている [櫻井 2000: 29]。ピニットの定義によると、開発僧とは「何かしらの活動を村人たちとともに協力し、彼らの生活様式を改善するような運動の目標をもち、継続的に実践している僧侶または僧侶たちのこと」である [Phinit 1986: 10]。また、政治社会学者のソンプーンは、サリット元首相による開発主義政策とサンガとの関わりから「開発僧」について論じ [Somboon 1977]、国家の開発政策やサンガの意向から独立して地域開発活動を行う僧侶として「開発僧」を捉えた [Somboon 1988]。さらに、コーンケン大学は東北タイの開発僧の活動に関する量的調査を実施している [Nonseet and Sak 1991]。彼らの調査・研究は、東北タイの村落部において、開発活動を展開する一部の僧侶たちを他の僧侶たちと区別し、「開発僧」という語で呼び始めた初期のものであった。またその一方で、「開発僧」を盛んに取り上げてきたのは開発学でもある。とりわけ、内発的発展論者たちは、僧侶の地域開発活動を、国家による経済発展一辺倒の開発政策に対して、仏教的思想に基づいた精神的開発を伴うものとして注目した。また、彼らを「開発僧」と呼んで、内発的発展の担い手として高く評価し、そのオルターナティブな思想や活動の内容を紹介してきた<sup>2)</sup>。

これに対して、櫻井は従来の「開発僧」に関する議論が、僧侶の社会的役割に対する理念と現実とを分化していない点を指摘し、「開発僧」はサリット元首相の主導する開発政策とサンガの協力関係という政治・社会的コンテクストのもとで出現したことを論じている [櫻井 2000]。また、櫻井は、厳密な質的調査・事例比較の方法論を採用する必要性を主張すると同時に、過去の調査データに基づいて「開発僧」の世代ごとの特徴を描き出

した。その結果、「開発僧」として典型的に描かれる僧侶の姿はことの一面に過ぎず、現実の開発実践において、一般庶民の布施を用いて社会資本を充実する寺院の機能は、コミュニティ・センターとしての伝統的な機能に由来し、人々の崇敬を集める僧侶の能力もまた伝統的なものであると結論付けた〔櫻井 2004: 13-15、2006: 7-19、2007: 188-189、2008〕。

櫻井による、一連の開発僧研究は、実証的データの比較・分析に基づいた「開発僧」の社会史研究として評価されるものである〔c.f. 泉 2002、2003〕。しかし、「開発僧」たちを、結局は従来の伝統的な寺院の機能や僧侶の能力に基づいて活動していると結論づけてしまうならば、ことの本質を見落としかねない。なぜならば、「開発僧」たちが上座仏教の僧侶であり、伝統的な寺院および僧侶の役割を有しているのは、ある意味では当然のことだからである。むしろ重要なことは、彼ら「開発僧」たちが、そうした伝統的な役割を用いて、どのように新たな実践を生み出しているのかという点にあり、また、それを彼ら自身がどのように捉えているのかという彼らの解釈ではないだろうか。

なお、人類学では、これまで「開発僧」がほとんど主題化されてこなかったが、人類学者のダーリントンは、「開発僧」を一般在家者たちの生活世界の側から描き出そうとした〔Darlington 1990〕。彼女の博士論文は、北タイ地域で「開発僧」と名高いチェンマイ県メーリム郡のプラテープカウィー師を事例に、同師の開発活動に対する村びとの語りや解釈を詳細に記述したものである<sup>3)</sup>。その研究意義は、開発と仏教に関する先行研究の多くが、「開発僧」の思想や活動にのみ注目しがちであ

ったのに対して、僧侶の崇高な思想に共感しながらも、それをフォローしきれない村びとたちにみる理想と現実の相克を描き出したことである。しかし、残念ながら、彼女は先述の意義以上に理論面での貢献を行えず、結果的に、東北タイ中心の開発僧研究に対する北タイ版という印象を読者に与えてしまっている<sup>4)</sup>。

## (2) 本稿の視座

これまで検討してきた「開発僧」に関する先行研究には、いずれも僧侶本人にとって「開発僧」とはどのような意味をもつのか、という個人の経験から問いかける視点を欠いている。先述のように、「開発僧」とは実体的な概念ではなく、さまざまな主体によってさまざまな用いられ方をするあいまいな用語である。だとすれば、このとらえどころのない「開発僧」を実体化して論じるよりも、僧侶たちが「開発僧」という言説をどのように用いて、いかなる実践を生み出しているのかを考察するほうが、今日のタイ社会における「開発僧」をめぐる現状をより明らかにできるだろう。

従来、東南アジア大陸部の人類学的研究は、村落社会に暮らす人びとの、仏教と精霊信仰のシンクレティックな宗教実践を明らかにしてきた。タンバイアは、東北タイを舞台に、儀礼と村落の社会構造の形成との相互関係について優れた研究を残している〔Tambiah 1970 など〕。このような人類学的な研究に対し、田辺は、1970年代以降の急速な社会変化を考慮し、従来の上座部仏教社会の研究を批判的に検討している〔田辺 1993: 16〕。特にタイの仏教に関しては、僧-俗の関係を軸として、僧は修行と儀礼を執り行い、人びとはひたすら功德を積む儀礼や慣習的行為を続けるといっ

た伝統的な仏教とは異なる仏教運動が、都市を中心に勃興してきたことに注目している。具体的には、二つの新仏教運動（タマカーイ運動およびサンティ・アソーク運動）のような、消費社会における個人の欲望に対応する運動や、仏教聖者（*arahan*）への信仰、呪物の普及および商品化の動きなどを取り上げている。ここでは「開発僧」は直接的に論じられていないため、これら新仏教運動との対比において、「開発僧」がどのような位置づけにあるかは定かでない。しかし、「開発僧」と呼ばれる僧侶たちや「開発僧」を名乗る僧侶たちには、「寺に居て食べて寝ているだけではだめだ」、「我々僧侶は村人にお返ししなければならない」、といった従来の僧侶のあり方に対する自省の念が、共通のモチーフとして見受けられる。このことから、「開発僧」たちの試みとは、サンガの正統性を揺るがすような対抗的運動ではないにしろ、既存の仏教に対してよりよい実践を目指したゆるやかな運動として捉えられる。特徴的なのは、今日、その運動の領域を、地域開発や保健・福祉の分野に求めていることである。

新仏教運動という観点から、「開発僧」を論じたものには矢野と櫻井の論考がある<sup>5)</sup>。矢野は「開発僧」をグローバル化時代における、村落部での新仏教運動のひとつとして位置づけている〔矢野 2004 : 62-65〕。また、櫻井は、メルッチの新しい社会運動論を参照し、現代タイという後期資本主義社会における新仏教運動として、都市型新宗教（タマカーイ寺とサンティ・アソーク運動）と仏教伝統による開発実践（開発僧）を取り上げ、開発僧」を農村部における新仏教運動と位置づけた〔櫻井 1995、メルッチ 1997〕。伝統的な村落仏教が布施の金銭的多寡を競う傾向にあるのに対

し、「開発僧」たちは消費文化にあおられた過剰な欲望を自制し、執着を絶つことを村人たちに説き、さらには村人の経済的自立を導く存在であるという〔櫻井 1995 : 50-53〕。このように、「開発僧」を論じる上で、新しい社会運動論を用いる点は興味深いが、その際には、僧侶自身が、また住民たちが、運動にどのように参加して主体化していくのかというミクロなプロセスを検討する必要があるだろう。またそのためにも、今日のタイ社会における、「開発僧」という言説をめぐる僧侶や人びとの実践の複層性を看過することはできないのである。

### 3. 「社会のため」に生きる僧侶

#### ーチェンマイ県 D 寺僧侶 I 師の事例ー

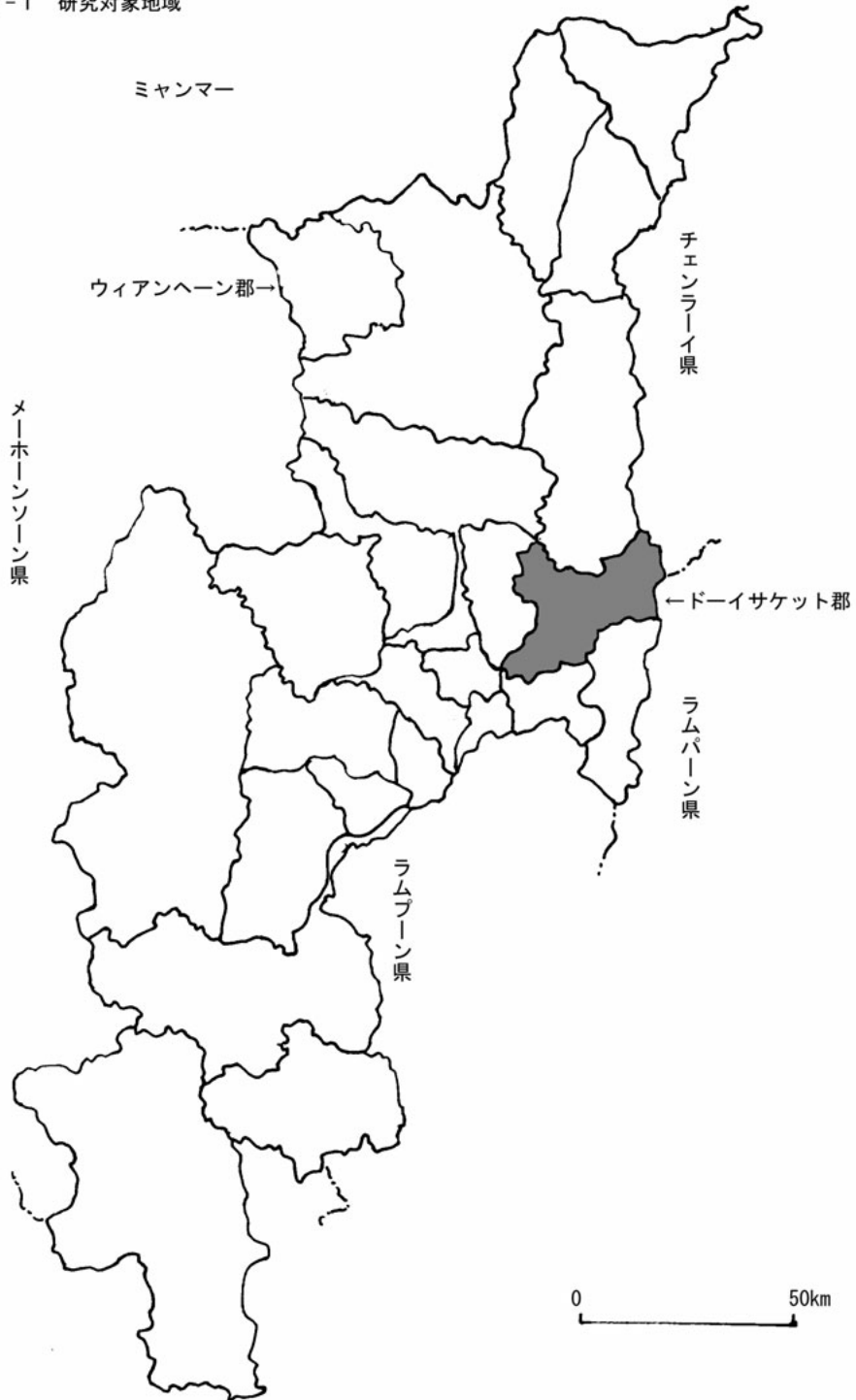
本節では、チェンマイ都市近郊のドーイサケット郡 D 寺（マハーニカーイ派）の僧侶、プラマハー・インソーン師（Phra Maha Inson、以下 I 師と略）に着目する。なお、本節で用いるデータは、主に筆者の行った現地調査によって得られたものである<sup>6)</sup>。その他、D 寺の出版物や D 寺僧侶を対象とした論文等も資料として適宜参照している。以下では、まず I 師を取り巻く社会環境である D 寺と、先代および現住職の活動を概観した上で、I 師の活動を紹介する。

#### (1) D 寺を取り巻く社会環境

##### 1) CD 村

ドーイサケット郡はチェンマイ市街地から約 20km 北東部へ進んだところに位置する（図-1）。

図-1 研究対象地域



D 寺のある CD 区 CD 村の付近は、古くからチェンマイーチェンラーイ間の交易ルートとして栄え、山林地に自生するミアン (*miang*)<sup>7)</sup> の塩漬け販売が主要な産業であった。CD 村の開拓については、隣接する PK 村の開拓者・インタウォン氏一族によるという説が有力である<sup>8)</sup>。インタウォン氏はほかタイ・ルー族の人びとは、19 世紀頃ランナー王朝によってシップソーンパンナーから連れられた後に、移住を繰り返し、一部が現在のドーイサケット郡辺りに定住した<sup>9)</sup>。インタウォン氏が CD 村に市を立てたことから、次第に北タイの平地民コン・ムアンや中国系の物売りたちが集住するようになった。現在の CD 村住民の主要な民族構成はコン・ムアンで、郡内の主要な公共機関がすべて集まる中心地となっている。残念ながら、D 寺の建立に関する文字資料は残されていないため、講堂や僧坊などが建てられた時期は定かでない。伝承では、仏陀の時代に丘の上で起こった不可思議な出来事が D 寺仏塔の縁起とされている<sup>10)</sup>。最近出版された D 寺の資料によると、D 寺は 1612 年に建立され、1918 年に浄域 (*wisungkhammasima*)<sup>11)</sup> を受けたと記されているが、どの資料を参照したかは不明である [Phramaha Ruengsonwong 2001 : 5]。

## 2) D 寺の概略

D 寺では、1976 年にプラテープ・ウィスutti クン師 (Phra Thep Wisuthikhun、以下 W 師と略) が住職代行およびドーイサケット郡サンガ長に就任した。この W 師が、現住職の先代住職に当たる。W 師 (83 歳) は、メーホーンソーン県メーサリアン郡出身で、教育機会を求めて地元で沙弥出家した後、チェンマイ市内の寺院へ移住した。

続けて比丘出家をした W 師は、チェンマイ県サンガ内部で着実にキャリアアップを成し遂げ、1956 年にはチェンマイ市内のブッパーラーム寺 (Wat Buppharam) 住職となった。ブッパーラーム寺の住職を務める傍ら、W 師は、チェンマイ県一帯の農村で開発活動を開始した。活動の主な内容は、協同組合の設立、居住地の整備、農民グループの支援、織物産業の推進などで、その多くは、ドーイサケット郡の農村地域に集中する [Thewan 2005 : 16]。W 師が D 寺の住職代行を務めていたのは 5 年間に過ぎないが、その間は、特にドーイサケット郡での農村開発活動に精力的に取り組んでいた<sup>12)</sup>。その後、W 師に代わって D 寺住職に就任したのが、現住職のプラ・ポーティランシー師 (Phra Phothirangsi、以下 P 師と略) である。

P 師は、1945 年ナーン県中心部の商家に生まれた。父は仏教徒、母はキリスト教徒の家庭で、3 人兄弟の長兄であった P 師は、地元のプラネート寺 (Wat Phranet) で寺子になると、16 歳で沙弥出家、21 歳で比丘出家した。さらなる教育の機会を求めて、1971 年にチェンマイ市内のブッパーラーム寺に移り、そこで W 師と出会った。1981 年、P 師は U 師に代わって D 寺住職に就任し、教育 (郡内の中学・高校での授業、沙弥の世俗・宗教教育の拡充)、宗教布教 (仏教行事の開催、仏日や行事の際の説法、沙弥と比丘のための瞑想訓練、在家者向けの出家機会の創出、夏季沙弥出家の実施)、寺院整備 (各種施設の建設や修復、植樹など)、地域開発 (CD 村火葬場建設の支援、D 寺所有地の無償貸与) など、多岐にわたる活動を展開してきた<sup>13)</sup>。これらの活動が評価され、2000 年、D 寺は教育省宗教局から開発模範寺院 (*wat phatthana tua yang*) に選出された。

### 3) HIV/AIDSの流行とP師の取り組み

P師の来寺以降、D寺は地域開発活動に熱心な寺として名を馳せるようになった。その節目をもたらしたのはHIV/AIDSの流行であった。今日、P師は、北タイの僧侶のなかで最も早い時期にHIV/AIDSケア活動を開始したと言われ<sup>14)</sup>、P師自身にもその自負がある<sup>15)</sup>。NGOなどが主催するHIV/AIDS関連のセミナーでは、しばしば「HIV/AIDSに果たす僧侶の役割」というテーマが設定され、P師やI師が招請される[Phonthip et al. 1998]。

1980年代後半から猛威をふるったHIV/AIDSは、都市部の特定のリスクグループ間のみならず、次第に、日雇い労働者や農民の多くが暮らす都市近郊部でも爆発的な感染拡大を招いた。ドーイサケット郡もまた、典型的な地域の一つであった。田辺が詳しく論じているように、全国で最も早く立ち上がった自助グループが「ドーイサケット未亡人の会 (*klum mae mai amphoe Doi Saket*)」で、1989年にこのD寺で結成された[田辺 1999]。当初は、D寺所有地の無償居住地域内にある、同会のリーダー女性宅にHIV感染者が集い始める形でグループが形成された<sup>16)</sup>。P師は、活動の場を探していた彼/彼女たちに、D寺敷地の使用を許可する形で支援を始めた<sup>17)</sup>。D寺敷地に設立された「慈愛と援助のための財団」(*mulanithi khwam metta lae uea ari*)<sup>18)</sup>には、感染者たちが集まってほうきや足拭きマットの製造販売、集会やセミナーを開催するようになった。さらに、P師は、感染者や家族に対する精神的な励ましと物質面での援助(寄進物の余りを手土産にする等)を目的に、郡内のHIV感染者のもとへ独自の家庭訪問も開始した<sup>19)</sup>。同時に感染者の自助グループ

も、郡立病院と協力して、新メンバーに対するカウンセリングや、メンバー同士による家庭訪問を実施し始めた。こうしてP師の始めたHIV/AIDSケア活動、特にドーイサケット郡内のHIV感染者宅への家庭訪問に、I師が同行するようになると、やがてI師は保健・福祉活動に対する関心を高めていった。

## (2) I師の事例

### 1) 経歴

I師(37歳)は1971年、チェンマイ県ウィアンヘーン郡に生まれた。両親は、ミャンマー・シャン州よりタイ国側に移り住んだタイ・ヤイ(シャン族)で、I師は二人兄弟の次男として生まれた。12歳のとき、小学校6年を修了し、地元の寺院で沙弥出家した後、ウィアンヘーン郡内ゴーンロム寺(Wat Kong Lom)へ移って勉学に励んだ。出家の理由は、他でもなく教育機会の追求である。その後、16歳のときに親族の紹介でD寺へ移った。その2年後にはマハーチュラーロンコーン仏教大学チェンマイ校に入学し、宗教学を学ぶ。21歳で比丘出家した際は、P師が授戒師を務めた。I師の大学在学中は、ちょうどドーイサケット郡など都市近郊部でHIV感染が爆発的に拡大した時期であり、P師がHIV感染者の支援活動を開始した時期でもあった。I師は、P師の活動を手伝う傍ら、同大学の修士課程に進学したが、最終的には修士論文を提出しないまま満期退学している。

### 2) 保健・福祉活動

住職のP師が1990年に郡サンガ長に就任してからは、サンガ行政に関する会議や行事のために多忙を極め、HIV/AIDSケア活動の現場にもなか

なか自分で行く余裕がなくなった。そこで、以前から P 師の活動を手伝っていた I 師が、P 師に代わって中心的に活動するようになった。1996 年には CD 区エイズ委員会 (*kammakan AIDS tambon CD*)、2001 年には CD 区ヘルスケア委員会 (*kammakan dulae sukkhaphap tambon CD*) が設立されたが、その立ち上げの過程に I 師も参加している<sup>20)</sup>。後者と前者の違いは、委員会の関心が HIV/AIDS だけでなく、区内における保健・福祉全般へと広がっていることである。

CD 区ヘルスケア委員会は、郡立病院の医師、看護師、自治体職員、保健ボランティア、各村の村長、HIV 感染者、および仏教僧によって構成される。活動内容は、家庭訪問プロジェクト (2002 年～)、世界エイズデー・イベントの開催 (毎年 12 月 1 日)、CD 区内の人々の健康祈願のためのスープチャター・ルアン (*suepchata luang*) 儀礼の開催 (毎年 1 月)、1 人 1 パーツ基金の設立、などがある。このうち、最も中心的な活動は家庭訪問プロジェクトで、委員会メンバーと各村の保健ボランティアが訪問チームを組む。訪問チームは、「困苦にある人びと」 (*khon thi thuk yak*) を対象とし、CD 区内の村 (全 13 か村) を週に 1 つずつ訪問する。実際の訪問では、看護師が主導権を握り、血圧測定、薬服用の指導、行政サービスの適応が検討される。I 師や他の僧侶が訪問に参加した場合は、病に苦しむ人のために、綿糸を手首に巻きつけたり、経文を唱えたりと、他の委員会メンバーとは異なる役割を見せている。

I 師がこの委員会において才覚を発揮するのは、実際の訪問現場よりも、委員会の会議で活動内容や方針について話し合う場面である。そのため、リーダーシップの強い主導者というよりは、調整

役といったほうが相応しい。実際、I 師も訪問に参加することはあるが、むしろ稀である。例えば 2005 年 8 月～2006 年 3 月の訪問活動で、筆者が参加した 12 回のうち、I 師の参加は 2 回に過ぎなかった。

I 師のような僧侶は、独自の HIV/AIDS ケア活動を展開するという手法よりも、郡立病院や自治体を中心とした、「コミュニティ・ケア」を志向する地域レベルでの新しい保健・福祉システムの構築に参加する手法をとっている<sup>21)</sup>。そのため、I 師が活動を行っているからと言って、かつてのように、D 寺の敷地に HIV 感染者グループが頻繁に出入りするような風景はほとんど見られない。しかし、その一方で D 寺に集まるのは、HIV/AIDS ケア活動を行う僧侶たちで、彼らは自分たちが果たすべき役割は何か、といった議論を活発に繰り返している。その際、僧侶たちは、D 寺の P 師や「チェンラーイ県メーチャン郡サンガエイズ組織」 (*ongkon AIDS khanasong amphoe Mae Chan changwat Chiang Rai*) の家庭訪問活動を模範例として取り上げ、僧侶による保健・福祉活動を各地で実施するよう促進している。

### 3) 僧侶のネットワーク作り

I 師は、チェンマイ県内だけではなく、北タイ地域一帯やバンコクなどへも、頻繁に会議やセミナーに出かけている。I 師はかつて、HIV/AIDS に関するセミナーに参加した際、周囲から「他に HIV/AIDS ケア活動を行う僧侶はいないのか？」と質問され、答えに窮した経験を忘れられないでいる<sup>22)</sup>。このことをきっかけに、I 師は HIV/AIDS ケア活動を行う数少ない知人僧侶に声をかけ始め、2000 年には北タイ地域一帯で「社会のため」



(*phuea sangkhom*) の仕事をする僧侶約 100 人を D 寺に集めた。その集まりは、「北タイコミュニティ開発僧ネットワーク」(*khruetakhai phra nak phatthana chumchon phak nuea*) の前身となった。同ネットワークでは I 師が中心となり、マハーチュラーロンコーン仏教大学チェンマイ校のある、チェンマイ市内のスアンドーク寺 (*Wat Suan Dok*) や D 寺を拠点に、情報・意見交換のためのセミナーや会議を開催している。また、北タイ各地にいるメンバーの活動を見学したり、雑誌を発行したりもしている<sup>23)</sup>。

さらに 2006 年 1 月には、I 師らは HIV/AIDS のみに特化して「タイ国エイズに関する僧侶ネットワーク」(*khruetakhai phrasong dan AIDS nai prathet Thai, Monks Network Working on AIDS of Thailand=Mnat*) を立ち上げた。これは、HIV/AIDS ケア活動を行う僧侶が、全国レベルで連携し、互いに意見交換するものである<sup>24)</sup>。活動内容は、参加メンバーの僧侶たちの活動報告や、他宗教のネットワークとの意見交流会、近隣諸国(ラオス、ベトナムなど)の僧侶との交流ツアー実施などである。

#### 4) I 師の考えと自身による解釈

2005 年 5 月現在、D 寺には比丘 27 名が止住しており<sup>25)</sup>、D 寺は都市近郊郡の中核寺院という様相を呈している。P 師がサンガ行政で多忙になると、これまでの仕事を弟子僧侶たちに引き継ぐ必要が出てきた。これほど多くの比丘が居れば、I 師以外の僧侶に保健・福祉活動を引き継ぐことも可能であったはずだが、I 師が一挙に引き受けている。その理由を、P 師も I 師もそれぞれ、この分野における I 師の関心の高さによって説明する<sup>26)</sup>。

また、I 師は、自分のこれまでの仕事を「社会のため」の仕事と捉え、P 師の傍らで学んだ経験が出发点だと理解している。また、彼にとって「社会のため」の仕事は仏教の果たすべき任務であり、「僧侶であることの意味は、人びとの苦を消滅させること」であり、それこそが仏陀の教えの最も根幹であると考えている。

かつての聖人と同じような実践にふけることはできないが、我々は凡人、俗人であることもまた事実である。人びとの心を軽くし、楽にしてあげることができれば、それでよい。涅槃の善因善果に到達するような実践はできなくとも、人びとの苦を消滅してあげることができなくとも、苦を和らげる (*bao bang*) ことができればそれでよい。瞑想で涅槃に到達することができても、それは自分一人だけのことにすぎない。我々は人びとの苦を軽減することを手伝うほうが気持ちよく、幸せである。

(2007 年 9 月 1 日 I 師へのインタビュー)

このような考えをもつ I 師は、「北タイコミュニティ開発僧ネットワーク」のコミュニティ開発僧とは、「社会のため」に仕事をする僧侶のことであると説明する<sup>27)</sup>。

#### 4. 考察:「社会のため」に生きることの意味

これまで検討してきた、D 寺僧侶 I 師の「社会のため」の仕事は、僧侶個人のレベルにおいて、また社会的なレベルにおいて、どのような意味をもつのだろうか。

教育機会を求めて出家し、親族の紹介を頼って D 寺にやってきた I 師にとっての直接的な師とは住職の P 師であった。その P 師は、「僧侶が社会のために仕事をするには、仏陀が初めから比丘に捧げた任務である」と断言する。その根拠となるのは「比丘たちよ、お前たちは、世界の人々のために役立つ、幸せになることを行い、道を歩みたまえ」<sup>28)</sup>という三蔵の中の一節である。筆者が何度も聞かされた、「僧侶は社会のために働かねばならない」(*phra tong thamngan phuea sangkhom*) という P 師のフレーズは、まさにこうした教えに基づくものであった。そして、P 師がこのように弟子を指導するのは、自らの師である W 師に同じように指導されてきたという経緯がある。I 師が「社会のため」の仕事に精力的に取り組んできたのは、このような P 師との出会い、さらには D 寺において W 師から P 師、P 師から I 師へ「社会のための」仕事を受け継がれていることが背景となっているのである。

I 師もまた、P 師や W 師と同様に、「社会のため」の仕事」を僧侶の行うべき任務と考え、これまで積極的に HIV/AIDS を中心に地域レベルでの保健・福祉活動に取り組んできた。

しかし、彼の取り組みは、P 師の行ってきた「社会のため」の仕事全体の一部分に過ぎない。P 師は、HIV/AIDS ケア活動を開始する以前から、沙弥および一般在家者の教育環境の向上を目指す活動によって、寺院および地域社会の開発に力を注いできた。HIV/AIDS ケア活動を開始したのは、1980 年代末、D 寺周辺においても HIV 感染が拡大し、多くの AIDS 患者が生まれたことがきっかけであった。P 師は立ち上がり、地元の感染者自助グループの支援や独自の家庭訪問活動を開始し

たが、P 師自身にとっては、これも幅広く展開する「社会のため」の仕事のひとつであった。P 師のこれまでの「社会のため」の仕事が、サンガ内部、宗教局や NGO など諸団体から表彰を受け、P 師は「開発僧」と呼ばれるようになったが、P 師自身が自らを「開発僧」と名乗ることは決してない。結果的に、P 師の取り組みは、「慈愛に満ちたルアンポー」という村びとがもつ P 師のイメージを再生産し、地域社会を越えた篤信家からの多額の布施をひきつけ、D 寺の経済的繁栄をももたしている。このような P 師の活動は、D 寺住職かつドーイサケット郡サンガ長という、郡サンガ・ヒエラルキーのトップとしての P 師の地位を支えるものである。

それに対して、I 師の「社会のため」の仕事は、HIV/AIDS を中心とする地域レベルでの保健・福祉活動に限定されている。同じ D 寺の若手僧侶 (25~35 歳) のほとんどは、学士以上の学歴を有し、同寺内で住職秘書、コミュニティ・ラジオ運営、道徳キャンプ監督、沙弥学校の管理・運営、パーリ語教師、などの役割をそれぞれ分担している。I 師もまた、他の若手僧侶たちと同様に、教育機会を求めて出家し、修士号への道のりを歩んだ。また、沙弥時代からの「絶対にブ라마ハーになってみせる」という夢を実現するべくパーリ語試験 6 級にも合格した。しかし、P 師の HIV/AIDS ケア活動を手伝うようになってからは、保健・福祉分野での地域開発活動に対する関心をますます深めるようになった。そのため、D 寺内および周辺の地域社会において、P 師に代わる保健・福祉分野担当の僧侶としての位置づけを築きつつある。しかし、今日、D 寺周辺の地域社会においてみられるのは、他の北タイ地域と同様に、郡病院、自

治体、HIV感染者グループや保健ボランティアなどによるコミュニティ・ケアシステムの構築である。CD区ヘルスケア委員会の設立は、こうした動きの現われである。僧侶たちは独自に活動を行うよりも、このようなコミュニティ・ケアを志向する動きに、一員として参加することによって、その中での自らの役割を見出そうとしている。I師もまた、このような新しい保健・福祉システム構築に参加することが、「社会のため」の仕事となると考えているのである。

I師曰く、「P師には住職としての力 (*barami*) が備わっているが、自分にはない」。また、そのようなP師について、I師は「ルアンポー (P師のこと) は本当の開発僧」、「慈愛に満ちた僧侶」と仰いでいる<sup>29)</sup>。I師は、P師から受け継いだ「社会のため」の仕事、HIV/AIDSを中心とする保健・福祉分野の活動で実践すると同時に、僧侶のネットワークづくりに奔走してきた。

それが、「北タイコミュニティ開発僧ネットワーク」と、「タイ国エイズに関する僧侶ネットワーク」の二つである。そのネットワークの詳細な検討は別に論じる必要はあるが、このような、「社会のため」の仕事をする「開発僧」たちのネットワーク化は、一寺院内の僧侶間関係や、サンガ内の師弟関係を越えた僧侶のつながりを構築するものである<sup>30)</sup>。彼らは、こうしたネットワークをつくることで、現代社会において僧侶が果たす役割は何かといったことを活発に議論している。そこでは、何が「社会のため」になるかという中身を、状況を見ながら臨機応変に掴み取り、僧侶としてあるべき姿方を自分たちで不断に再定義し続けているのである。このようなI師の実践が示しているのは、国家や開発の言説に単純に対抗するような

運動というよりも、モダニティという状況下において不確定な自己と向き合い、個のレベルで従来の僧侶のあり方との間に葛藤を抱えた僧侶たちのアイデンティティ模索の過程として捉えられるのではないだろうか。「開発僧」とは、その際に僧侶たちによって用いられる言説なのである。

## 5. おわりに

上座仏教の僧侶たちは、生活のさまざまな面で一般の在家者たちと明確に区別されるがゆえに、仏法を継承するにふさわしい者となり、また、そのような僧侶の共同体としてのサンガは清浄性を保つことが可能となる。この清浄性こそが、在家者たちにとって、徳を生み出す福田としてサンガの特質であった [石井 1975]。その意味で理念的には、彼ら僧侶たちは、まさに僧侶であるというそのことによって、「社会のため」の存在として十分なはずであった。

しかし、本研究の事例で取り上げたI師のような僧侶にとっては、保健・福祉活動を行うことこそが「社会のため」の仕事であった。特に、北タイにおいては、1990年代半ば以降、HIV/AIDSを含めた地域レベルでの保健・福祉をめぐる状況が変化し、コミュニティ・ケアを志向する動きが高まっている。ドーイサケット郡周辺の場合は、郡立病院、自治体、感染者グループ、保健ボランティアなどで構成されるヘルスケア委員会が設立されたことが、この現状をよく表している。I師にとっては、P師の手法とは違って、このコミュニティ・ケアを志向する新しい保健・福祉システムの構築に、一員として参加することが「社会のため」の仕事なのである。また、D寺においてW師、

P 師、I 師へと受け継がれる「社会のため」に生きる僧侶のあり方は、単に D 寺内で継承されたり、I 師の個人的な経験であるにとどまらず、寺院や地域社会を越えて北タイ、タイ全国に広がるものである。I 師の事例が示すような「社会のため」の仕事において、「社会」とは、もはや I 師のいる D 寺やその周辺地域社会の地理的広がりとは一致しないものとなっている。

しかし一方で、D 寺周辺住民からみれば、I 師とは D 寺に多数いる僧侶の一人に過ぎず、彼が考える「社会のため」の仕事と、住民たちが期待する「社会のため」の仕事との間にはズレが生じていることも想像できる。本稿では紙幅の関係上、僧侶の実践のみに焦点をあてて考察してきたが、これからは、僧侶と在家者との関係という重要な点についても論じていく必要があると考えている。

今後は、一方で I 師のような若手僧侶たちが、どのように「社会のため」という言葉を用い、積極的に「開発僧」という言説を利用して自己表象しているのかを明らかにし、また他方でそうした僧侶たちと在家者との関係を考察することによって、今日のタイ社会における国家・サンガ・コミュニティの関係を明らかにしていきたい。

### 【注】

- 1) 本稿において、タイ語の語彙は、タイ学士院 (*ratchabanditsathan*) の「音声に従うタイ語のローマ字表記規則」にならってローマ字化し、さらにイタリック体で記している。
- 2) 西川・野田(2001)、野崎(1995)、ピットヤヤー(1995)、Seri(1988)等。西川らは、仏教に根ざしたオルターナティブな仏教的開発の思想と実践を、「開発(かいほつ)」と呼んでいる[西川・野田 2001]。
- 3) プラテープカウィー師は当時、チェンマイ市中心部から北へ約 20km のワットパー・ダーラーピロム (Wat Pa

Dara Phiom、タンマユット派)の住職であった。同師は、FEDRA (Foundation for the Education and Development of Rural Areas)の代表を務め、山地区の教育支援や農民の貧困解消のための活動を行ってきた。また、森部もダーリントンの論文に基づき、プラテープカウィー師の事例を考察している[森部 2006]。

- 4) 本人も、歴史と政治の意味に関する議論が不十分である点を反省している[Darlington 1990: 18]。
- 5) タイの新仏教運動に関しては、既に数多くの研究がなされてきた[Evers and Sodum 1993、Jackson 1989、Taylor 1990、Apinya 1993、Keyes 1989、小野澤 1995ほか多数]。
- 6) 現地調査は、2004年4月～2006年5月の約2年間および2007年8月～9月の1か月間行なった。このうち、2005年5月～2006年5月の1年間は、D寺のあるCD村にて定着調査を行った。なお、2004年4月からの1年間は(財)大阪国際交流センター「大阪・アジアスカラシップ」の助成を受けた。
- 7) 茶葉を蒸して塩漬けにしたもの。北タイでは嗜好品や来客のもてなしに用いられてきた。
- 8) インタウォン(1866-1949年)氏は両親の代にPK村辺りへと落ち着いたという[Anu 2006: 10-13]。
- 9) ドーイサケット郡近辺の村の中で、最も古い歴史をもつのはLN村である[Koson 1994: 21]。また、近年、同郡近辺のタイ・ルー族の人びとの間でも文化伝統の保存や復興の動きが活発化している。
- 10) その不可思議な出来事とは、D寺の北側にある池にまつわるものである。「(前略)蓮池に目をやると、そこには雌雄の竜王が食べ物を探して泳いでいるところであった。仏陀は六色の光線を二体の竜王に向かって送ると、不思議なことに竜王は信仰心を抱いて、それぞれ男女の人間に変身し、仏陀に池に咲く蓮の花を献上した。仏陀はその蓮の花を受け取った代わりに、男女に仏法と髪を授けた。この小山の上で、彼らは祈りを込めて石塔を建てて、その中に仏陀の髪を埋めた。」[Phramaha Ruengsonwong 2001: 5、Koson 1994: 19]。
- 11) タイの寺院には、この浄域をもつ寺院とそうでない寺院とがあるが、前者のみにおいてサンガへの加入儀礼である得度式を執り行うことが認められている。
- 12) W師は今日、「チェンマイに二人しかいなかった開発僧」と言われる僧侶のうちの一人である。もう一人は、ダーリントンが研究対象としたプラテープカウィー師である。1970年代半ば頃から同じように地域開発活動を率先してきた二人が、現在それぞれの派でサンガ長を務めていることは、僧侶による地域開発活動とサンガ内の位階上昇との興味深い関係を示唆している。この点については別の機会に論じたい。
- 13) P師は、ユネスコ(1993年)、クルーパーシーウィ

チャイ財団 (1994 年)、タイ国文化協会 (1995)、赤十字協会チェンマイ県 D 郡支部 (2001 年)、D 郡文化協会 (2004 年) などから各種受賞してきた。また、P 師はチェンマイ県サンガより優秀郡サンガ長 (1992 年)、チェンマイ県サンガ長より優秀教理学校教育行政長 (1994 年) に選ばれ、また D 寺は教育省宗教局より優秀仏教日曜学校 (1997 年) としても選出された [Sathaban Ratchaphat Chiang Mai 2004]。

14) デラーストットによれば、P 師が初めてエイズと出会ったのは、D 寺に感染者が出家してきたときである [Chiranut 1999]。また浦崎は、P 師の活動開始時期を HIV 感染者自助グループ設立年の 1989 年としている [浦崎 2002: 87]。

15) 筆者は、P 師が「当時は HIV/AIDS ケア活動をする僧侶はルアンポー (すなわち自分自身) だけだった」と説明する場面にしばしば遭遇した。

16) 同会のリーダーは、会の解散とともに東北タイの出身地へ戻ってしまったという (2005 年 6 月 2 日、D 寺所有地内にいるリーダーの妹へのインタビューより)。その後、この地域での感染者自助グループは結成と解散を繰り返した。現在は「ドイサケット郡感染者ネットワーク」(*khruetakhai phu tit chuea amphoe Doi Saket*) が活動している。

17) タイにおいては、HIV 感染者の自助グループ活動の場はしばしば寺院であった。また、HIV/AIDS と寺院との関わりについては、自助グループ活動が寺院を場として利用するだけでなく、僧侶が活動のイニシアティブをとるケースや、寺院自体が施設化するケースもある [岡部 2004]。

18) この財団は、P 師の HIV 感染者に対する寛容な態度に感銘を受けたインド系タイ人 2 人組が、500,000 バーツの寄付を行なったことが経緯で設立された。HIV 感染者の活動も、この財団建物にて行なわれていたが、現在は資金援助も休止され、活動は特に行っていない。

19) 2007 年 8 月 31 日、筆者による P 師へのインタビューより。

20) 看護師 S によれば、ドイサケット郡で HIV/AIDS が流行し始めた頃、郡の公衆衛生局、郡立病院、NGO、僧侶らが独自に活動し、さらに NGO も入ってきたことから収集がつかなくなったため、皆で集まる目的でエイズ委員会を立ち上げたという (2005 年 10 月 10 日、看護師 S へのインタビューより)。

21) 現在、「ドイサケット郡感染者ネットワーク」は、郡立病院の中の地域医療「心の連帯室」(*hong ruam chai*) へと拠点を移動し、代表の A 氏が常駐している。同ネットワークは、月に一度、病院内の空き部屋を利用してミーティングを開き、情報交換、I 師による瞑想指導や昼食会を行なっている。

22) 2005 年 3 月 22 日、筆者による I 師へのインタビューより。

23) 北タイコミュニティ開発僧ネットワークのメンバー僧侶の一人が、Thailand Research Fund の助成を受けたことがきっかけで、同基金の地方事務局が僧侶の調査活動の相談役を引き受けた。後に、Thailand Research Fund の地方事務局、マハーチュラーロンコーン仏教大学チェンマイ校、北タイコミュニティ開発僧ネットワークの三者が協議し、「ポーティヤライ・地域のための調査連携センター」(*sun prasanngan kan wichai phuea thongthin Phothiyalai*) を立ち上げた。このポーティヤライが、北タイコミュニティ開発僧ネットワークの活動のアレンジや書類作成等の実務を請け負っている。

24) このネットワークは、NCA (Norwegian Church Aid) による、東南アジア大陸部における生活の質向上センター支援プロジェクトの一つである。

25) 沙弥は 37 名、寺子 (*dek wat*) は 2 名、住み込み労働者 4 名であった。ただし、これは雨安居前のデータであり、安居中はずっと多くの比丘が止住している。

26) 2007 年 8 月 31 日筆者による P 師へのインタビュー、同年 9 月 1 日筆者による I 師へのインタビューより。

27) 2005 年 3 月 22 日、筆者による I 師へのインタビューより。

28) P 師が筆者に説明した一節の、筆者による日本語訳である。

29) 2005 年 3 月 22 日および 2007 年 9 月 1 日、筆者による I 師へのインタビューより。

30) タンバイアは、サンガが農村と都市をつなぐ人的ネットワークの通り道 (*avenue*) であると述べ、出家してサンガの一員となることによって、寺院から寺院へとよりよい環境を求めて移動し、キャリアアップを図る僧侶個人に焦点をあてて論じた [Tambiah 1976: 313-364]。しかし、「開発僧」のように、世俗社会における問題の解決を通じて、僧侶としての自己を模索する僧侶たちの実践や、彼ら僧侶たちのネットワーク化の動きについては論じていない。

## 【引用文献】

Anu Nuenhat 2006. *Adit "Doi Saket": Sangkhom mueang Chiang Mai 12*, Chiang Mai: Wanitda kanphim.

- Apinya Fuangfusakul 1993. "Empire of Crystal and Utopian Commune: Two Types of Contemporary Theravada Reform in Thailand", *Sojourn*, 8 (1): 153-183.
- Chiranut Wonguthai 1999. *Botbat phrasong nai kan songkhro chumchon panha rok AIDS: karani sueksa Phrakhru Sophonpariyattisuthi Wat Doi Saket changwat Chiang Mai*, Master thesis, Faculty of Public Health, Chiang Mai University.
- Darlington, Susan M. 1990. *Buddhism, Morality and Change: the Local Response to Development in Northern Thailand*, Ph.D dissertation, University of Michigan, UMI.
- Evers, Hans-Dieter. and Sodium, Sharon. 1993. "Religious Revivalism in Southeast Asia: An Introduction", *Sojourn* 8(1): 1-10.
- 石井米雄 1975. 『上座部仏教の政治社会学』創文社.
- 泉経武 2002 「村落仏教と開発の担い手の形成過程－タイ東北地方「開発僧」の事例研究－」『東京外大東南アジア学』7: 55-72.
- 2003 「「開発」の中の仏教僧侶と社会活動－タイ・スリン県の「開発僧」ナーン比丘の事例研究－」『宗教学論集』22: 93-110.
- Jackson, Peter A. 1989. *Buddhism, Legitimation and Conflict: the Political Functions of Urban Buddhism*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Koson Songwonsit (ed.) 1994. *Doi Saket: Rong roi arayatham Sipsong Phanna*, Chiang Mai: Samnakngan Kanprathomsueksa amphoe Doi Saket.
- Keyes, Charles F. 1989. "Buddhist Politics and Their Revolutionary Origins in Thailand", *International Political Science Review*, 10 (2): 121-142.
- メルッチ、アルベルト (山之内靖ほか訳) 1997. 『現代に生きる遊牧民－新しい公共空間の創出に向けて－』岩波書店.
- 森部一 2006. 「タイにおける「下からの」村落開発運動に関する若干の議論－北タイの開発僧プラ・テープカウィによる運動を手掛かりとして－」『アカデミア』84: 1-40.
- 西川潤・野田真里 (編) 2001. 『仏教・開発・NGO－タイ開発僧に学ぶ共生の智慧－』新評論.
- 野崎明 1995. 「タイの新しい農村開発運動－東北タイの開発僧の事例研究－」『東北学院大学論集 経済学』129: 107-149.
- Nonseet Phisitphanphon lae Sak Prasandi 1991. *Thamniap phrasong nak phatthana phak Isan*, Bangkok: Sathaban wichai lae phatthana Mahawitthayalai Khonkaen lae Sathaban Wichai Phutthasat Mahachulalongkon Ratchawitthayalai.
- 岡部真由美 2004. 「現代タイにおける仏教寺院の HIV/AIDS ケア活動の社会的位置づけ－フアリン寺を事例として－」『ぼぶるす』3: 1-38.
- 小野澤正喜 1995. 「タイにおける仏教原理主義の2つの類型と世俗内倫理」南山大学人類学研究所 (編) 『宗教・民族・伝統－イデオロギー論的考察』5: 117-130.
- Phinit Laptananon 1986. *Bodbat phrasong nai kan phatthana chonnabot*, Bangkok: Culalongkorn University Social Research Institute.
- ピッターヤ・ウォンクン (野中耕一編・訳) 1995. 『村の衆には借りがある－報徳の開発僧－』(NGOと開発シリーズ no.3)、燦々社.
- Phonthip Chueamnochan lae Wanthana Butyuwang (eds.) 1998. *Sarup phonkan sammanna rueang phrasong kap kan kae panha rok AIDS nai phak nuea*, Chiang Mai: Khana Phesatsat, Mahawitthayalai Chiang Mai lae samnakngan khanakammakan haeng chat krasuwang suksathikan

- Phramaha Ruengsonwong (ed.) 2001. *Phumpanya fa phanang: sueksa tamnan-utthayan tham haeng wat D*, Chiang Mai: Wat D.
- 櫻井義秀 1995. 「近代・開発の言説支配と対抗的社会運動」『現代社会学研究』8 : 28-59.
- \_\_\_\_\_ 2000. 「地域開発に果たす僧侶の役割とその社会的機能－東北タイの開発僧を事例に－」『宗教と社会』6 : 27-46.
- \_\_\_\_\_ 2004 「宗教と社会開発－東北タイの開発僧－」『印度哲学仏教学』19 : 245-275.
- \_\_\_\_\_ 2006 「東北タイの仏教と開発－三調査比較－」『北大文学研究科紀要』120 : 1-79.
- \_\_\_\_\_ 2007 「東北タイの寺院と地域社会－ガマラーサイ郡の寺院悉皆調査より－」『北海道大学文学研究科紀要』121 : 171-269.
- \_\_\_\_\_ 2008 『東北タイの開発僧－宗教と社会貢献－』梓出版社.
- Sathaban Ratchaphat Chiang Mai 2004. *Prawat lae phonngan khong Phra Phothiransi(Phayap Chitapunyo)*, Khana Manusayasat lae Sangkhomsat, Sathaban Ratchaphat Chiang Mai: Chiang Mai.
- Seri Phongphit 1988. *Religion in a Changing Society: Buddhism, Reform and the Role of Monks in Community Development in Thailand*. Hong Kong: Arena Press.
- Somboon Suksamran 1977. *Political Buddhism in Southeast Asia: the Role of the Sangha in the Modernization of Thailand*, New York: St. Martin's Press.
- \_\_\_\_\_ 1988 "A Buddhist Approach to Development: The Case of 'Development Monks' in Thailand". in *Reflections on Development in Southeast Asia*. Lim Teck Ghee (ed.), Singapore: Institute of Southeast Asian Studies: pp26-48.
- Tambiah, Stanley J. 1970. *Buddhism and Spirit Cults in North-east Thailand*, Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ 1976. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against Historical Background*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 田辺繁治 (編・著) 1993. 『実践宗教の人類学－上座部仏教の世界－』京都大学学術出版会.
- \_\_\_\_\_ 1999. 「自己統治の技法－北タイのエイズ自助グループ－」『上智アジア学』17 : 119-145.
- Taylor, Jim L. 1990. "New Buddhist Movements in Thailand: An 'Individualistic Revolution' Reform and Political Dissonance", *Journal of Southeast Asian Studies*, 21 (1): 135-154.
- Thewan Ekachan 2005. *Phrasong kap kan phatthana chumchon: Phra Thepwisuthikhun (Kusol Khonthawaro)*, Chiang Mai: Nanthaphan Printing.
- 浦崎雅代 2002. 「多様化する開発僧の行方－HIV/エイズ・ケアに関わる開発僧の出現を事例として」『宗教と社会』8 : 79-92.
- 矢野秀武 2004. 「タイの上座仏教と公共宗教」池上良正ほか(編)『岩波講座第9巻 宗教の挑戦』, pp.51-74.

